

## 元第十五師団

### 歩兵第六十七連隊

京都府 瀬川 一郎

私は昭和十五（一九四〇）年五月一日、臨時召集にて福知山第二十連隊に入隊、以来、昭和二十一年二月十一日、アメリカ軍の上陸用舟艇M84に乗せられて佐世保港に上陸、ここで足掛け七年の軍務の期間を終えました。

この間、三回の召集を受け、大作戦にも三回参加し、現地での小規模の討伐、警備にも出勤しました。加えて陸軍病院での入院生活も経験し、病院船での内地送還、内地での兵営生活、外地での野営生活等の種々の軍隊組織の中での生活体験も体験してきました。

第一回の召集は、先にも述べたように、昭和十五年五月一日、臨時召集にて福知山第二十連隊に入隊、第十一中隊に編入され、三カ月の教育訓練

の後の八月十三日に召集解除となったのです。

第二回の召集は昭和十五年十一月十日、同じく福知山第二十連隊に入隊、今度は第十二中隊に編入され、十六日に福知山発、十八日に宇品港より出帆、二十三日には南京に上陸、直ちに南京地区の警備を担当しました。

さらに十二月八日には南京港を遡航、十三日に漢口に上陸して、同日より漢口の警備に着きました。

明けて昭和十六年一月十八日より二月十七日の間は、初めての大作戦である予南作戦に参加しましたが、これが一番苦勞した作戦でした。雨が降つて十日も靴が抜けず、雨の中を敵の弾が足元にピューピュー飛んで来る。早くこの弾に当たりたいというところまでの心境になるのです。この間の戦闘は、二十四日に聞曹庄付近の戦闘、二十九日には西平付近の戦闘、二月八日には皇宮付近の戦闘に参加し、二月十七日に漢口に帰還しています。

続いて二月十八日から四月四日まで栄湖南方作戦に参加し、その間三月一日には陸軍一等兵に進級しています。

四月六日より江北区の警備を行い、九月一日に上等兵に進級しました。以後、年内は江北地区無為県付近及び清郷工作などにも参加していません。

昭和十七年三月十五日、第三期の清郷工作に参加し、四月三十日より八月二十日までは、かの浙贛作戦に参加、翌八月二十一日に松江付近の警備及び清郷工作に参加しました。

しかしこの頃より病気になる、九月十五日には左湿性胸膜炎のために嘉興陸軍病院に入院となりました。以後、蘇州陸軍病院に後送された。さらに上海陸軍病院、廣島陸軍病院、京都陸軍病院を経て、十二月十日には敦賀陸軍病院に後送され、二十日には敦賀連隊（中部第三十七部隊）に復帰して、昭和十八年三月一日に第二回の召集と軍務は解除となったのです。

このような陸軍病院での入院生活において、中でも上海陸軍病院で内地送還の命令を受けた時の私の心境は、原隊復帰が本心であったのですが、当時の看護婦長からの言葉に「内地に帰っても、また召集がくるから心を静めて帰りなさい」と言われた言葉が、今もお耳の底に残っています。ただ後日気が付いたことですが、私が病院船の人となり上海を出港した日と、私の原隊の歩兵第六十七連隊がインパール作戦のため南京を出発した日と同じ日だったとは、私の運命を分けた日であつたと、今だに思っています。

昭和十七年四月、米軍の日本本土に対する空襲が始まり、中国大陸中部にある敵の飛行場を破壊、占領せぬ限り、日本本土の安泰は期せられぬこととなり、同年五月より八月に掛けて実施されたのが浙贛作戦でした。

我が歩兵第六十七連隊は、この作戦に参加のため南京を出発して、浙江省の原野への進撃が始まり、私は第三大隊本部の暗号手としてこれに参加

しました。この時の編成は通信兵三人と暗号手二人の計五人で、三号無線機一、発電機一の装備でした。

四カ月にわたるこの大作戦中に、一番困ったことは、雨の中の進軍と、軍事機密である暗号書の保管であつて、気を許して寝ることもできず、また時間を決めて交信をすることもあつたのです。交信の時間がくれば、列から離れて作業を開始し、受信した電報の解読に長い時は一時間余りも要し、その間も部隊は待たずに移動しています。そのため一個分隊の護衛を受けての作業となるのですが、交信終了後には、五キロ余りも先に進軍している本隊を追及せねばならず、その強行軍が大変でした。

また作業中に敵の襲撃を受けずに終わった時は、神の助けとしか考えられず、もし敵の攻撃を受けていたらどうなっていたかと思うと、今考えて見ても、身震いする思いです。

こうして昭和十八年三月一日に敦賀病院で、第

二回の召集は解除となったのですが、昭和十九年一月七日には、第三回目の臨時召集が来て、今度は京都歩兵第三連隊に入隊することとなりました。そして部隊は独立歩兵第二五三大隊第三中隊に編入され、一月十日に動員完結、二月二十二日に門司港を出帆し、同月二十九日に南京に上陸しました。

五月二十日より河南作戦に参加しました。橋がなくて工兵隊が舟橋を造ったのですが、渡るのに約一時間を要したと思います。それだけ黄河の幅が広いものでした。その後、蒙古警備に向かい、警備に従事していましたら、ソ連軍が満州に侵攻してきたというので、南京まで行かずに引き返すこととなりました。

終戦は、蒙古へ戻りかけて、保定というところでしたが、汽車の中で中国の新聞を見て知りました。そこで我々は通信隊でしたので、東京のニュースを聞くというので聞きますと、やはりこれは事実ということが判り、蒙古に戻りますと、

既に在留邦人など大勢の方が、帰国の移動を始め  
ておりました。そこで乗っていた汽車は邦人に明  
け渡し、兵隊は張家口から一週間掛かって天津に  
戻りました。もう既に鉄帽や毒マスクなどの装備  
は捨てて天津に集結、武装解除となりました。

収容所生活に入り、天津の農場の警備や米軍の  
使役にも出ました。

復員は、昭和二十一年二月十一日、米軍の上陸  
用舟艇M84で佐世保港に上陸し、同日召集解除と  
なり、これで私の三回に及んだ召集と軍隊生活は  
終了しました。

## 中支作戦に参加して

京都府 出口 順市

私は、昭和十五（一九四〇）年十二月一日召集  
により、京都府岡崎勤労会館において入隊の手續  
をしました。ちょうど、若葉会館に分宿すること  
が指定されて、ほかの地区から入隊する方々を四  
〜五日待っていました。

昭和十五年十二月五日か六日でした、一緒に大  
阪港より出航し中支のタークというところに上陸、  
天津を経て石太線にて榆次へ、七里ほど歩いて部  
隊に入隊しました。

入隊した部隊は次の部隊でした。

北支山西省独立歩兵第四旅団第二中隊

片山部隊 菊田部隊 山田隊・山田大尉

入隊すると、片山師団長、菊田旅団長からそれ  
ぞれ訓示があり、緊張の一時でした。そこで初年  
兵の教育が始まったのですが、教育、演習をしな